

---

# 《Blade Of Onlin》

夜兔\_\_↗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『Blade Of Online』

### 【Zマーク】

Z7059Z

### 【作者名】

夜鬼

### 【あらすじ】

VRMMO『Blade Of Online』のサービスが開始された。版のテストプレイヤーの一人になり、このゲームにハマった俺は当然プレイを開始する。しかし『Blade Of Online』はクリアするまでログアウト不能のデスゲームだった。ゲームのハズレ武器を選んでしまった俺は他のプレイヤーから相手にされず、しかたなくソロで攻略を始めたことにした。だがその途中、俺はバグによって高レベルのモンスターは闊歩するエリアに飛ばされてしまう。果たして俺はこの世界から出ることが出来るのだ

ろう  
か。

巨大な樹木が並び太陽の光が殆ど入つてこない森の中で、俺は必死にモンスターの攻撃を避けていた。

全身が紅色の堅い殻に覆われた巨大なサソリ、シェルドスコーピオンが猛スピードで突進してくる。俺はこここの数週間で鍛えられたスキル『見切り』を使用する。『見切り』は発動すると相手の攻撃が来ると思われる場所に赤い線が現れる。俺はシェルドスコーピオンの突進を完全に避けられる位置を確認すると、『ステップ』で大きく横に跳ぶ。

シェルドスコーピオンはそのまま突っ込んで行き木に激突した。しめた、チャンスだ。

「はあああ！」

俺はシェルドスコーピオンの殻の隙間に手にしていた太刀の刃を滑り込ませる。ジュプ、と嫌な手応えが伝わつてくると同時にシェルドスコーピオンの上に表示されているHPバーが少しずつ減少していく。最初からレッドゾーンだったHPバーが最後まで削られ、消滅する。

シェルドスコーピオンはキシャアア、と断末魔の悲鳴を上げながら光の粒となって消滅していった。これがこの世界での死だ。こいつに限らず、俺もHPバーが無くなれば同じように死を迎える。そして生き返ることは一度とない。

レベルアップ音が一連続で響く。シェルドスコーピオンを倒したことで経験値が入ったことでレベルが上がったのだ。本来シェルドスコーピオンは俺のようなレベルの低いプレイヤーが倒せるモンスターではない。だから一気にレベルが二つも上がった。

なんでそんなレベルの高いモンスターを俺が倒せたかというと、

朝から今までずっと今のシェルドスコープオンと戦い続けていたからだ。因みに、現在時刻は夕方の六時半。

あいつの攻撃を避けてわざと樹にぶつけさせて怯んだところを、殻の隙間から刃を差し込んでダメージを取れる。これをずっと繰り替えし続けた。それで今、やっと倒すことが出来たのだ。

正直、もう立っているのが辛いぐらい疲れている。モンスターを倒すと自動的にアイテムはバッグの中に収納されるようになつている。もうここに用はない。洞窟に帰ろう。

俺が、いや俺達がこの世界に来てから一ヶ月。

VRMMO『Blade Of Online』のサービスが開始された日から、地獄は始まった。

○（後書き）

いつも夜兔と申します。VRMMOモノを書くのは初めてなので矛  
盾などが出てしまうかも知れませんが、一生懸命書かせて貰います。  
誤字脱字、感想など貰えると嬉しいです。

二十年前、軍が訓練のために開発したバーチャルリアリティ技術は今や世界中で使われている。体感型仮想空間装置の仮想空間を利<sup>ドリーム</sup>用した介護やスポーツなどが進歩していく中、ゲーム技術が取り残されていった。

ビジュアルやデータなどの問題により、『ドリーム』から出でいるゲームはどれもほのぼのとした生活系のゲームばかり。激しいゲームを好むプレイヤー達から、不満の声が上がる。そんな中、あるゲーム会社がVRMMO『Blade Of Online』の開発が成功したことを発表する。プレイヤー達は歓喜し、その発売を今が今かと待ちわびた。

発表から一年後、ゲーム会社から『Blade Of Online』の版が応募したプレイヤーに数量限定で配られた。俺、矢代<sup>やしだ</sup>あ<sup>あ</sup> 晓<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>版に応募し、抽選に選ばれた。

自分がゲームの中に入りモンスターと戦うというのは、やはり最高に楽しい。俺は版終了まで毎日何時間もプレイし、攻略していった。

それから一ヶ月、ついに『Blade Of Online』が発売された。

『もうすぐだな』

版で知り合ったガロンといつもプレイヤーから送られてきたチャットを見て緊張感がより高まる。

『Blade Of Online』のサービスが今日の午後二時から開始されるのだ。俺は出遅れないために『ドリーム』を頭にセットしている。十一時になつた瞬間に電源を入れて出遅れないようにならないとな。

版をやつている分、他のプレイヤーよりも有利とはいえ、おちしていればすぐに抜かされてしまう。ゲーム内でガロンとその仲間に合流し、すぐに攻略を開始するつもりだ。

「これで現実から目をそらせる」

俺は『Blade Of Online』のパッケージを眺めながら、そう呟いた。

俺には親が居ない。小さい頃に一人とも交通事故で死んでしまった。まだ小さかつた俺と妹の栞は祖母の家に引き取られる事になった。俺はあの時に誓つたんだ。栞だけは何があつても守ると。「暁お兄ちゃん」と懐いてくる妹だけは、幸せにしてみせると。

それがこれだ。大学受験に失敗し俺は浪人になつた。祖母に出して貰つた予備校のためのお金で俺はこの『ドリーム』を買った。最低だと思う。高校生になつた栞にも軽蔑された。祖母は何も言わず、家でゲームをする俺に料理を付くつてくれている。心が痛まない訳じゃない。だけど何かをする気になれないんだ。

そう言えば、栞は今友達の家に泊まりに行つて居るんだつけ。あいつもゲーム好きだから、もしかしたらその友達と『Blade Of Online』のサービスが開始されるのを待つてゐるかも知れないな。

そんなことを考へてゐる内に、『デジタル時計が十一時と表示する。俺は『ドリーム』の電源を入れ、『Blade Of Online』を開始した。目の前が少しづつ黒く染まり、やがて闇に落ちてい

つた。

『Blade Of Online』の世界、ヨーツンヘイムにはモンスターが跋扈する、まだ誰も足を踏み入れたことのない場所がいくつもある。プレイヤー達はその場所を探索し、奥にいるボスモンスターを倒して次のステージに向かっていく事になる。

使用できる武器はさまざまで、片手剣、両手剣、大剣、太刀、斧、槍などが存在する。まだ明かされていない武器もあるようだ。ただしこの世界には魔法という物がない。なのでプレイヤーは武器を手にし、自らの腕でモンスターを倒すことになる。それだけ聞くとあまり面白みのなさそうなゲームに聞こえるが、魔法の代わりに『スキル』や【称号】がある。プレイヤーはこれらを上手く使えるかが勝負の分かれ目となってくる。

武器は最初に選ぶことが出来るが、しばらく変更することが出来ないため慎重にいかなければならない。版で俺が使っていた太刀は全てが中途半端で、ハズレ武器とされている。だが、敢えて俺はハズレを引くね。レベルを上げていけば凄い技が出るかもしないしな。

『Blade Of Online』のスタートメニューで太刀を選ぶと、ようこそブレイド・オブ・オンラインへという文字が浮かび、俺は眩い光に包まれた。

## 1（後書き）

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

## 2 (前書き)

短くてすいません。次回から多くなっていく予定です。

目を開くと真っ白な壁に覆われた大きな部屋の中にいた。周りには俺と同じプレイヤーが立つており、隣の人と何やら話していた。人の気配や熱気までリアルに感じられる。『ドリーム』のゲームつて気配とか熱気とか細かい所にリアリティが無いから、やっぱ『B1 ade Of Online』ってすげーんだなあと再確認する。

つか、みんな大剣とか槍で武器に太刀を選んだ奴が全然居ないぞ……。版をプレイした奴が作った攻略WIKIに、太刀はハズレ武器つて書かれてたけど、そんなにハズレなのか……。確かに攻撃力でもリーチでも攻撃速度も全部半端だけどさ……。しかも結構扱いが難しいし。だけど敢えて太刀にしようつてプレイヤーはいいのかよ……。きっと俺以外にも居るんだろうけどこりゃ相当少ないかもな。

この部屋に入れられてから十分程して、プレイヤーの一人が悲鳴を上げた。周りがそれに注目する。

「ログアウト出来ねえぞ！？」

そんな馬鹿な、とステータスを開き、画面の右上に表示されるログアウトボタンを探す。……無いぞ。嘘だろ。

周りのプレイヤーがざわざわと騒ぎ出す。折角のゲームだつて言うのに運営がいきなり転けたな。というか今までこの白い部屋に入つていなきやいけないんだよ。このまま出られないのではないか、そんな考えが頭をよぎる。

その時、部屋の壁に四角いスクリーンの様な物が現れた。画面にはテレビの砂嵐のように白い線と黒い線が動き回っている。プレイ

ヤー達が黙つてそれに注目していると、そこから低い男の声が流れ始めた。

『約一万人のプレイヤー諸君、これから私が言つことを良く聞きたまえ。ログアウトボタンが無いのは運営のミスではなく、最初からそういう仕様になつているからなのだ』

プレイヤー達が再び周りと話し始める。

どういう事だ。ログアウトボタンが無いのが仕様？ つまり故意にログアウトボタンを消したのか？ 訳が分からぬ。

早いところガロンと合流したいが、この部屋にいる人間はかなり多い。ここから探し出すのは難しいだろう。

『それと現実世界からの干渉はほぼあり得ない。この世界では君たちの思考が『加速』されている。詳しい説明は省かせてもらうが、この世界での一年は現実世界での一秒にも満たない。ゲームを攻略せずにつこから出られるとは思わないことだ。』

プレイヤー達から上がる怒声や悲鳴を無視し、スクリーンからの声は続く。

『それとこの世界での死は現実での死に繋がる。君達プレイヤーの命、HPバーが無くなつた瞬間、現実世界での君達の脳に特別な電波が送られ、ショック死する』

空気が死んだ。今まで面白半分に騒いでいた連中も顔を引きつらせ、スクリーンを凝視している。俺は現実で死んだような生活をしてからこつちに来ても変わらない、なんて考えは浮かんでこない。やべえぞ、これ。嘘だろ？

『諸君らに伝えることはこれで終わりだ。最後にこのゲームを作った者の一人としてアドバイスをしておこう』

今まで無機質で淡々と喋っていた男の声に、僅かに楽しんでいるような色が混ざる。

『ここにいるプレイヤーは様々な武器を選んだことだらう。大剣、斧、槍、片手剣、両手剣、そして……太刀。プレイする前に攻略サイトを見ていた者は知っていると思うが、太刀はハズレ武器だ。威力では大剣に劣り、リーチでは槍に劣り、持ち運びやすさでは斧に劣り、手数では片手剣と両手剣に劣る。外見から太刀の方が片手剣より強そうなイメージがあるかもしれないが、片手剣は攻撃力は低いが空いた手に盾をもてるし、動きやすい。つまり太刀は全武器の中で一番弱い武器だ。これから命をかけてゲームをするのだから、仲間はよく選んだ方が良い。太刀なんて選んで足を引っ張られたら田も当たられない』

『え？ ちょ、待ってくださいよ運営さん。太刀、そんなに弱いんですか？ こんなに格好いいのに？ つーかなんでそんな武器作つたんですか？

周りのプレイヤーが一斉に俺の方を見てくる。視線には同情と蔑みが含まれていた。いや、お前らもそんな真に受けんなよ！

『ではこれより君達を最初の街の広場に転送する。そうしたら即行動に移すことをおすすめする。ポップするモンスターは無限ではないから経験値を稼ぎたいのなら迅速に行動することだ。では、命運を祈る』

スクリーンが消え、再び眩い光に包まれた。

Name : 暁

Lv1

Weapon : 太刀『鍛びた刀』

Skill :

Title :

Power : 10

Speed : 10

Perseverance : 10

Stamina : 10

Dexterity : 10

## 2（後書き）

Skillはスキル、Titleは称号です。Powerは筋力値、Speedは俊敏さ、Perseveranceは耐久値、Staminaは体力値、Dexterityは器用さです。これらは作中では基本的に日本語で書くつもりです。なんで英語にしないかといふと、ややこしくて間違えるような気がするからですわすいませんw

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

俺が太刀を選んだのはハズレ武器だからというだけじゃない。ハズレに挑戦してやる、という気持ちがあつたのは嘘ではないが本当の理由は他にある。それは、俺が剣道をやっていたからだ。太刀の長さや形が剣道でよく使う竹刀や木刀に似ていたため、振り慣れている物に近い武器を選んだ方がプレイしやすいと思った。だけど、まさかその選択のせいでこんな事になるとは思わなかつた。

ヨーツンヘイムの世界でプレイヤーが最初に訪れる街の名前は『セーフティータウン』。その名の通り、モンスターが近寄らない安全な街だ。未攻略エリアを攻略するとそこに新しい街を作る事が出来るため、中盤当たりには全く使われなくなるだろうが、序盤ではプレイヤー達の拠点となる重要な街だ。

『セーフティータウン』に転送されたプレイヤー達の行動は三つに別れた。すぐにソロでエリア攻略に動き出す者、仲間を募集してパーティを組む者、助けが来ると信じて何もしない者。俺は助けが来るのは思わなかつたし、版をプレイしているとはいえ単独で行動するのは危険だと思ったので仲間を集めることにした。したのだが……。

「ガロン、なんでだよ！一緒にパーティ組もうって言つたじゃないか！」

『Blade Of Online』のプレイヤーのために作られた大きな掲示板を利用し、ガロンとその仲間三人と合流したのは良かったのだが、仲間にはなれないと断られた。理由は太刀だから。太刀がハズレとはいえ仲間が多い方が良い、と反論のだがガロンの仲間の一人が「お前は信用できない」などと言いやがつた。ガロン

とこの仲間達は他のゲームで知り合い、何度も現実であつて居るらしい。版で知り合つただけの俺に背中を呑わせる危険は犯せないんだと。まあ街を出てモンスターが出るエリアに行けばPK<sup>プレイヤーキリング</sup>が出来てしまうので警戒するのは分かるけど……。酷すぎるわ……。

ガロンの背は百八十？を越えており、百七十五？ほどの俺は見下ろされる形になる。背中に背負つている大剣と呑わされて凄まじい迫力だ。ガロンは申し訳なさそうに、だが有無を言わぬ口調で「すまない」と頭を下げる。仲間と共にどこかへ行ってしまった。因みにこのゲームは顔や髪の色など細かいところは変えられるが、骨格は大きく変えられない。何故なら、骨格を変えて身長を高くしたり低くしたりすれば重心がズレ、上手く動けなくなってしまうからだ。俺は顔とか髪は殆ど弄つていない。まあ今はそんなことはどうでもいいや。

「おい、あいつ太刀だぜ」「運営側にまで言われるって……」「仲間にしたら足引つ張られそうだよな」

俺の姿を見たプレイヤー達は皆馬鹿にしたような視線を向けてくる。嫌な予感がした。

その嫌な予感はすぐに的中した。誰にも仲間になつて貰えないのだ。太刀と言うだけで避けられ相手にされない。ありえねえ……。いくら運営があんな事言つたからってこれは極端すぎる。この非常に慎重になるのは分かるけど、そこまでしなくても言いジャン……。絶対仲間は多い方が良いんだしさ……。

それから一時間程度街をウロウロして仲間を作ろうと頑張つたが、全て断られてしまった。ならば同士を、と太刀の人を探してみたが、ソロで攻略しに行つたのか、上手く仲間を作れたのか、宿に引きこもつているのか、どこにも居なかつた。

……。

これは正直「マジでやばい。ソロで動くにも出遅れるし、仲間も出来ないしやばい。宿に引きこもる気は全くない。

掲示板で仲間を募集してみたら、『太刀使い乙www』とか『暁必死だなwww』とか書かれていた。掲示板は名前を出すことも匿名にすることも出来るため、俺の募集に書き込んだ奴らはみんな匿名だった。最悪だ。結局仲間見つからなかつたし。

しばらく呆然としていたが立ち止まっているわけにも行かないので、版の知識を生かしてエリア攻略に行くしかない。どうせレベル上げに丁度良い場所はもうプレイヤーでいっぱいだらうしつ……。はあ。

第一攻略エリア『ワイルドフォレスト』にいるモンスターは大して強くない。だが囮まれてしまえば終わりだし、レベル1で行くには危険だ。だが仕方ない。この太刀使い暁が一人で攻略してやろう。NPCがやつていてるショップに行き回復薬などを揃え、俺は『ワイルドフォレスト』に出発した。のだが、その途中で妹にあった。

「栄？」

「兄さん……」

妹も外見を殆ど変えていなかつたようで、一目で分かつた。流れるような黒髪と雪のように白い肌、スッと高い鼻。同じ親から生まれたとは信じられないほどの美人だ。やはりゲーム好きのお前もこれをしてやつていたのか……。

妹の周りには、妹と同じ高校生ぐらいの女の子一人と男が二人いた。パーティーを組んだのだろう。勿論この中に太刀使いは居ない。妹は片手剣使いだ。

「兄さん？　こいつもしかして掲示板で馬鹿にされてた太刀使いじや……」

男の一人が困惑したように妹に話し掛けるが、妹はそれを無視して俺を睨み付けてきた。その迫力に思わず後ろに一步引いてしまう。

「現実でも役立たずの貴方はこっちでも役立たずだったようですね。誰にもパーティーを組んで貰えなかつたみたいですが当然です。私達もあなたをパーティーに入れるつもりはありませんので。話し掛けないで下さい」

周りの仲間が「良いのか?」と聞くが妹は何も言わず、俺に背を向けて歩いていってしまった。仲間は妹と俺を見比べ、しばらくして頭を下げる妹について行ってしまった。

俺はしばらく呆然と立っているしかなかつた。他のプレイヤー達に見捨てられるのはまだ良い。だが肉親である妹にまで見捨てられたというのは結構堪えた。何もせず祖母の家で金を貪っていた俺が悪いとはいえ、今は命に関わるかも知れないという緊急時だ。それなのに見捨てられた。悲しみと同時に怒りが沸き上がつてくる。

「……行くか」

妹のことは取り敢えず後回しにしよう。今は攻略の方が大切だ。

『ワイルドフォレスト』に版で出てきたモンスターは、スライム、<sup>クローラ</sup>巨大芋虫、グリーンスマイル、フロータイボールの四種類だけだ。最奥部に居るボスはハングリーザー。

ボスはともかくとして出てくるモンスター単体ならレベル1でも何とか倒せる。ただしモンスターが一体とは限らない。囲まれたら大分厳しいだろう。

ゲームの中だからかマイチ緊張感が足りない気がするが、『ワイルドフォレスト』の入り口が見えてきたあたりで気を引き締める。中には多くのプレイヤーが居るだろうが、基本的に自分の力で進まなければならぬ。パーティーなら別だけど……。

「ん？」

入り口の手前の空間が微妙にひび割れていた。ゲームによくある背景がおかしくなるやつか。最先端のVRMMOとはいえ、まだ完全じゃないようだな。これって触つたらどうなるんだ？　ひび割れていた部分を指でツン、と突いてみるとその部分から全体が砕けていき、大きな穴が出来た。

「なんだこ、れ！？」

穴の中を覗き込もうとした瞬間、何かに引っ張られるように中に引きづり込まれた。穴はどこかに繋がっていたようで、俺は頭から真っ逆さまに落下していった。

おい運営。バグくらいこちやんと直せよ…………。

### 3（後書き）

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです

地面に叩き付けられた痛みを堪えながら、何とか立ち上がる。それから高いところから落ちるとダメージを受けるのを思い出し、HPバーを確認したが変化はなかった。バグのお陰かどうかは知らないが、どうやら落下ダメージは無かつたようだ。それなら落ちたときの痛みも無にして欲しかったな。

それにしてもここはどこだ？ 巨大な樹が生えていることから森の中というのは分かるが、『ワイルドフォレスト』にこんな場所はなかつたはずだ。それに雰囲気が違う。上手く説明できないが、ここは嫌な空気が流れている。何かが潜んでいそうな、いるだけで不安になつてくる。

現在地点を確認するためにステータス画面を開いてみる。頭の中で出てこいと念じるだけでステータス画面を出すことが出来る。視界に現れると言うよりは脳内に表示されると言つた方が正しいのかも知れない。ステータス画面は自分以外の人間には見ることが出来ないし。

ステータス画面には自分の現在地点を確認できる機能が付いている。俺は自分の居る場所を確認して顔を覗めた。

プラットフォーム  
現在地点。

どこだよ。版でプレイしたときにこんなダンジョンは発見されなかつたぞ。と言つことは少なくとも『ワイルドフォレスト』よりはモンスターのレベルが高いと言つことだ。これはやばいかも知れん。下手したらモンスターから一発攻撃されるだけで即死、なんて事もありえる。

しばらく周りを見回してみたが樹のせいで遠くに何があるのか分からない。葉の隙間から僅かに漏れている太陽の光がいつなくなる

とも分からんし、動くしかないか？

この世界はリアルだから朝日晚と時間の流れがちゃんとあるし、季節や天候も変化する。今は昼過ぎだろうか。夜になれば視界は最悪だし、夜行性のモンスターもいるかもしれない。  
しようがない。探索するとするか。

バキバキバキと樹の枝が折れる音に続き、獣の低い唸り声が響く。それからシャカシャカ力と地何かが地面を移動する音が聞こえ、地面が震える。

俺は苔生して緑色になった樹の後ろに隠れ、モンスター同士の戦いを見ていた。緊張のせいで荒くなつた自分の息と心臓の音がうるさい。

しばらく森を探索していると巨大な熊のようなモノが寝ているのを発見してしまった。地面の上で大の字になつていびきをかいているそれは、間違いなくモンスターだ。それもレベルの高い。

モンスターはHPバーの上に名前が表示されるようになつていて。ただし、モンスターのレベルが自分よりかなり上の場合、『????』と表示されるようになつていて。この熊のHPバーの上にはハテナマークが浮いていた。つまり俺よりもレベルはかなり上だ。

今寝ていると言うことは夜行性のモンスターだろう。刺激を与えなければ起きることはない。触らぬ神にたたり無し、ここはスルーしていく。

そう思つていると、いきなり紫色の液体が熊の腹部に付着した。何かが溶ける音がして熊のHPが僅かに減る。

熊が起きた。

おもむろに立ち上がり血走った目を見開き、大きな口を開いて咆哮する。そのあまりの迫力に俺は立っていることが出来なかつた。

その場で膝をついて耳をふさぐ。恐らくこの熊は威圧系のスキルを持つているのだろう。威圧系は自分よりレベルが低い者の身動きを鈍くする。

想像以上にやばいな……。もし見つかったら逃げることも出来ずに戦われる。

咆哮が終わつた熊は自分の眠りを妨げた者を睨み付ける。視線の先にいたのはこれまた大きなサソリだつた。熊よりは小さいがサソリの常識から考えるとかなりでかい。全身が紅色の殻で覆われている。かなり堅そうだ。

サソリは三体おり、六本の足を使って熊を取り囲んだ。サソリもレベルが離れているようで名前が表示されない。どうやらこの森にいるモンスターは俺のレベルを遥かに上回つて居るみたいだな……。おい運営早く助ける。

睨み合ひ熊とサソリ達。先に動いたのはサソリだつた。もの凄い勢いで一斉に熊に突進していき、その鋏で殴りつけた。熊のHPが一割ほど減る。熊は自分の正面にいるサソリに向かつて爪を振り下ろした。鉄と鉄をぶつけたような鈍い音が響き渡る。やはりサソリの殻は堅かつたようだ。それでも攻撃を受けたサソリのHPが30%ほど削られていた。恐るべし熊の攻撃力。

熊の攻撃は止まらない。他の二匹にも爪を叩き付ける。両腕をブンブンと振り回しながらサソリを殴りつける熊。結構シユールだ。サソリも負けていない。瘤のついた尻尾の先端を熊に突き刺す。熊のHPが減少すると同時に紫色に変色する。毒状態だ。やっぱ毒をもつてやがつたか……。

毒状態になるとHPが少しづつ削られていく。毒消しを飲めば消せるし、しばらく立てば毒状態からも解放されるのだが、強敵と戦っている時に毒状態になるのはまずい。

熊とサソリの戦闘が始まってから十分。三体のサソリはHPは半分ほど削られていたが、熊のHPを半分以下のオレンジ色まで減らしていた。熊の毒状態は治つたモノの、サソリの方が圧倒的に有利だ。

三方向から鋏で殴られたり肉を引きちぎられたりして、ついに熊のHPがレッドゾーンに突入する。樹の影からこっそり覗いている俺はサソリの勝利を確信した。

その時。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

咆哮の後、熊の全身が真っ赤に光り出す。目は真っ赤に輝き、牙は伸び、口が大きくなる。なんだこれは。こんな現象は見たことがないぞ……。

熊がサソリの一体を殴りつけた。頑丈な殻が粉々に砕け散り、サソリはHPバーを全て削られた。残りのサソリは尻尾で突き刺して熊を毒状態にしたが、その後殻を碎かれて死んでしまった。光になって消えていくサソリ達。熊は勝利の雄叫びを上げた。

今の俺があんな化け物に勝てる訳がない……。いくら体力が殆ど0でもあのサソリ達の殻を粉々にしたあいつに近づきたくない。毒状態も治つてしまつたし、しばらくすればHPが少しづつ回復していくだろう。その前に早いところ逃げよう……。

立ち上がるため、今まで隠れていた樹に手をつぐ。すると湿った感触と樹が傾く感触が伝わってきた。

「あ」

どういう訳か、樹は腐って脆くなつていたらしい。そのまま倒れていいく。その先には全身真っ赤な熊さんが、樹が熊に当たつて砕ける。

やべえっ、気付かれる！ 急いで逃走しようとした俺の耳に、熊のどこか哀しげな叫びが聞こえた。恐る恐る振り向いてみると、熊が光の粒となつて天に昇つっていく所だった。

え？

レベルアップ音が脳内に響いた。といつよりはもの凄い連続して聞こえてきた。

ローン、レベル1になりました。ローン、レベル2になりました。ローン、レベル3になりました。ローン、レベル4になりました。ローン、レベル5になりました。ローン、レベル6になりました。

版の時は聞こえただけで飛び跳ねて喜んだ電子音が続く。

その後、音はレベルが26になつた所で止まつた。続いて脳内に文字が浮かび上がつてくる。

スキル『ステップ』『ジャンプ』 固有スキル（ヨニークスキル）  
『一段ジャンプ』に変化しました『隠密』『見切り』『察知』『受け流し』『ライト・スクエア』『クリア・スタブ』『兜割り』『抜刀斬り』『剣士の迫力』を会得しました。

称号【農士】【下克上】【隠密者】【?/??】を獲得しました。

もう訳が分からん……。



あの熊のHPはサソリ達によって本当にギリギリまで削られていたようだ。倒れてきた樹にぶつかつただけで死んでしまうほど。それと俺の凄まじい勢いでレベルアップには理由があった。モンスター同士が戦った場合、勝者は倒したモンスターの経験値と幾つかのアイテムを自分の物に出来るのだ。いくらレベルが離れているとはいえ、熊一体であそこまでレベルアップする筈がない。サソリ達の分も含まれていたようだ。

と、俺はあの後探索して見つけた洞窟の中で先程の出来事を自分の中で整理していた。この洞窟はどうやらプレイヤーのための休憩地点のようだ。洞窟内は温かく奥の方にわき水が溜まっている。入り口のすぐ側に生えている樹には何種類かの果物もなっていたし、何よりモンスターが入れなくなっている。ステータスから見ることが出来るマップは、この洞窟をモンスターが侵入できない、安全を表す青色で表していた。

「ふう……」

洞窟の壁にもたれ掛かり一息つく。

色々なことがありすぎて頭がおかしくなりそうだ。だが、こんな時こそ冷静にならなければならない。取り敢えず熊を倒したことでのアイテムボックスにアイテムが入っている筈だ。まずそれを整理しよう。

ボックスの中には『セーフティータウン』で買った大量の回復薬や解毒剤などその他に見たことのないアイテムが入っていた。

所持品・回復薬×10、解毒剤×5、スタミナドリンク×5、赤

熊の毛皮×2、赤熊の爪、赤熊の生肉×4、太刀『血染め桜』、紅殻蠍の剛殼×7、紅殻蠍の鋏×3、紅殻蠍の毒尾、紅殻蠍の毒肉×

10、魂の欠片×10

どうやらモンスターの一部が大量に手に入つたようだ。この手のアイテムは武器や装備を作つてくれる鍛冶屋に持つて行くと、モンスターに応じた武器や装備を作つてくれる。まあ未攻略エリアにはそう言つた店はないからハツキリ言つて今は「ゴミ」だな。

因みにアイテムの解説を見て分かつたのだが、あの熊の名前はブラッディベアで、サソリの方はシェルドスコーピオン亞種らしい。亞種って何だよ亞種つて。

モンスターの一部を今はただの「ゴミ」と言つたが、肉系のアイテムは違う。このゲームには空腹の設定があり、定期的に何かを食べないとステータスにペナルティを負つてしまつ。最終的には餓死してしまうとか。さつきみつけた果物以外に食べる物が無い俺としては、肉は命を繋ぐ大切なアイテムだ。ただ毒肉つて書いてある方は食べると数秒間毒状態になつてしまつ……。

「おお……」

そして太刀『血染め桜』。ごく僅かな確率でモンスターから武器や装備を手に入れられる事があるが、まさかいきなりゲット出来るとはな……。今俺が装備している太刀は『錆びた太刀』。かなり頼りない。ゲットできたのはかなりの幸運と言える。ただ、武器を使用するには“筋力値”が必要になる。

重い武器を装備して振るには当然筋力がいる。筋力値とはプレイヤーの筋力を表すステータスの一つだ。筋力値が高ければ攻撃力も上がるし、鍛えておいて損はない。

筋力値の他にも“俊敏さ”“耐久値”“体力値”“器用さ”と色々あり、どれもレベルを上げていけば自然と鍛えられていく。レベル

ルを上げる以外にも鍛える方法はあり、筋力値と耐久は武器で素振りしたり筋トレをする事で、俊敏さと体力は動き回ることで、器用さは武器を作つたり鍛冶をしたりすることで上げることが出来る。レベルとこれらのステータスを上げていくことが、このゲームの醍醐味だ。

少し話がずれたが、取り敢えずしばらくは武器に不足はない。と言つても筋力値を上げる必要がありそつだが。

後は魂の欠片。これは即死攻撃を受けたとき、HPを10まで回復する事が出来るアイテムだ。版の時は入手することはなかつたが、かなりのレアアイテムと聞いている。もちろん使い捨てだ。

アイテムは大体把握できたし、次はスキルと称号だな。

スキルとはプレイヤーのHPバーの下に表示されるスタミナバーを減らす事で使用できる特殊技だ。普通の人間では出来ない素早い動きや攻撃、防御などを可能とする。中にはスタミナを消費しないスキルもあるが、大体はスタミナを使う。スタミナが無くなればスキルが使えなくなり、回復を待つしかない。

スタミナはHPと同じでレベルアップすれば送料が増えていく。体力値を上げることでスタミナは増やすことが出来る。

スタミナを使い切つてしまつたときは、自然回復の他にスタミナドリンクを飲むことで回復することが出来る。スタミナが切れるとピンチになるのでスタミナドリンクは欠かせないアイテムの一つだ。

「さてと……。どれどれ会得出来たスキルはつと……うおー?」

固有スキル《二段ジャンプ》だと……。マジか……いきなり固有スキルゲットとか幸運すぎるだろ……。《二段ジャンプ》はジャンプした後に空中でもう一度ジャンプすることが出来るという便利なスキルだ。固有スキルとはとても珍しいスキルの事をさす。会得条

件は全て不明。他のプレイヤーが使っている固有スキルを手に入れることは殆ど不可能に等しい。

他にゲットしたスキルも戦闘ではかなり便利な物ばかりだつた。初めて見るスキルも幾つがある。今この森から出ることが出来たらトップランカーになれるんじゃないか？

因みに今の俺は他のプレイヤーの様子を知ることは出来ない。さつき掲示板を見ようとしたらエラーという文字が表示された。クソ、バグのせいか。運営H……。時間を加速するとかそんな技術使う暇があつたらバグくらい消せよ……。

次に称号。これはプレイヤーの行動がその称号の入手条件を満たしていると手に入ることが出来る。持つているだけでステータスが上がつたりするので手に入れておいて損はない。

でも今回手に入れた称号、俺何にもしてないのに入手条件が満たされていたのか？ バグによってここに来たのだから変なことがあつてもおかしくないからな。

【罠士】は頭を使って自ら手を下さずに何体かモンスターを倒した場合に手に入る。器用さがあがる称号だ。確かにブラッティベアを倒すときに手は下してないけどさ……。

【下克上】はその名の通り自分よりレベルの高いモンスター、もしくはプレイヤーを倒したときに手に入る。ステータスが全体的に上昇する便利なスキルだ。これは結構入手しにくい称号なのでラッキーだったと言える。

【隠密者】……これは 版では出てこなかつたから入手条件は分からぬ。俊敏さを上げ、《隠密》の効果を上げる力がある。  
最後だが……。【????】。これはよく分からん。説明には何も書いてないし、バグのせいなのか？

取り敢えずこれでブラッティベアを運良く倒せた事によつて手に入れたアイテムやスキルを一通り整理できた訳だが……。

俺、  
これからどうしたらいいんだ？

赤熊の生肉を頬張りながら、俺はこれから事を考えていた。夜になつたようで外はもう真っ暗だ。大きな何かが動き回つている気配もするし朝までは出ない方が良いだろう。今日はこのまま洞窟の中にいよう。

赤熊の生肉はとても美味かつた。食感はふにゃふにゃで生肉そのものだが、何故か塩胡椒の味が付いていて食べられた。現実なら食あたりとかになりそuddがこの世界ではそんな物はないから大丈夫だろう。一口食べるたびに全身に力が漲つてくるようだ。スタミナが僅かに増えしていくのが見える。きっと焼いたり料理した方が美味しいのだろうが、道具がないのだからしようがない。そう言えば料理用のスキルとか合つたはずだし、もしこの森から抜け出すことが出来たら調べてみるか。

「はあ」

こんな化け物だらけの森から本当に出られるのだろうか。外に出るだけでも命懸けだというのに。恐らく今の俺ではブラッティベアーはあるかシエルドスコーピオン亞種（次から面倒なので普通に呼ぶ）にも勝てないだろう。『血染め桜』はかなり強いだろうが必要筋力値が高くて今の俺には使いこなせないだろうし、スキルも上手く使いこなせないだろう。レベルが上がったとはいえ筋力値などのステータスは殆ど上がっていない。今の状況で外に出るのは自殺行為だ。

はあ。考えるのは明日にしよう。肉を食つたお陰で腹もふくれたし、眠くなってきた。今日は取り敢えず眠ろう。

翌朝、熊肉を食べて湧き水で喉を潤した俺は『血染め桜』で素振りをしていた。かなり重くて少し振つただけで手が痛くなってきたが、振り続ける。

急に素振りを始めたのにはちゃんと理由があり、剣を振ることで筋力値や体力値を上げることが出来るし、太刀の熟練度を上げることが出来るからだ。熟練度とはその武器をどれだけ使いこなせるかを表した物だ。ステータスも熟練度もモンスターと戦つた方が上がりやすいけど、戦つたら瞬殺されそうなので地道にトレーニングしていくしかない。頑張ろう。

昼。熊肉を食べて少し休憩した後、今度は手に入れたスキルを使って練習を始めた。スキルも熟練度と同じように使えば使うほどレベルが上がっていく。スキルレベルが上がれば効果が上がるので、どんどん使った方が良い。

『ステップ』を使って何度も何度も色々な方向に動き回り、スタミナが切れたら休憩して回復させる。その後『一段ジャンプ』を何度も何度も使う。『一段ジャンプ』は一回飛び上がった後、まるで空中に足場があるかのようにもう一度跳ぶ事が出来る。これは結構スタミナを使うようで、すぐに休憩しなければならなくなつた。

一つのスキルで体力が尽きるまで練習し、スタミナが回復したら違うスキルを使う。これを何回も何回も繰り返す。

「『ライト・スクエア』！！」

発動と同時に剣が青色に輝き、四連続で目の前の空間を斬り付ける。ライト、と付いているように威力はそこまで高くない。その代わり、消費するスタミナが低く何発も使うことが出来る。何発も使えると言つても、スキルを一度使うと一定時間次のスキルを発動できなくなるので途切れ途切れだが。

「うしてトレーニングをしていると、あつと言ひ間に夜になつてしまつた。全身が筋肉痛で痛い。クソ、筋肉痛とかこんな設定要らないだろー。リアル過ぎるぞ……。

最後の熊肉を食べ湧き水を飲んだ俺は疲労によつてすぐに眠りに落ちていつた。

次の日、あのサソリの肉を吃るのはどうも気が引けるので、洞窟の前に生えていた木の実をいくつか取つてきた。三種類ある。

「…………」

三種類の木の実の内、一つしかまともなのがない。フィレの実は体力を回復してくれる木の実だが、残りのボレロの実は吃ると毒状態に、ビレレの実は麻痺状態になることが分かつた。出来ればフィレの実だけを食べたいところだが、これらの果物は一日二三つずつしか採取できないみたいだ。果物一つだけではお腹はふくれないし、ボレロの実とビレレの実も食べないと空腹からは逃れられない。

……取り敢えず、朝はフィレの実を食べておこう。ビレレの実の麻痺状態は体力には影響ないから安全地帯のここなら吃ても問題ない。ボレロの実の毒状態も体力が0になるまで続くことはないだろう。だが朝から吃るのはモチベーションが下がるので、フィレの実を二つ食べておくことにした。

昨日と同じように昼まで素振りをし、ビレレの実を二つ吃る。全身が痺れて動けなくなつたが数分の事だつたし、空腹はちゃんと解消された。それからスキルのトレーニングをする。

夜はボレロの実を三つとフィレの実を一つ食べた。毒状態は全身が熱くなり胸がじくじくと痛んだ。幸いなことに毒状態は短くフィレの実を吃べれば大体回復することが出来た。空腹も解消できだし、

もう寝よ。

それから俺は毎日果物を食べながら素振りやスキルの練習をし、ステータスを伸ばしていく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7059z/>

---

《Blade Of Onlin》

2011年12月25日19時55分発行